関ケ原町

地震ハザードマップ

地域の危険度マップ＆揺れやすさマップ

平成23年3月11日に「東日本大震災」が発生し、東北地方の太平洋沿岸を中心に大きな被害が出ました。

関ケ原町において、養老－桑名－四日市断層など、多くの活断層が存在します。また、南海トラフを震源とする地震の発生する確率が高くなっており、いつ大きな地震が発生してもおかしくないと危惧されています。

関ケ原町では、このような地震が発生した場合に備え、日頃から地震に対する備えを心がけていただくとともに、地震発生時には町民の皆様が安全な場所に避難して頂き、被害を最小限に抑えることを目的として、「地震ハザードマップ」を作成しました。

地震ハザードマップとは、地震災害による被害を予測し、その被害の発生範囲および被害程度の情報を地図に示したものです。このハザードマップでは、養老－桑名－四日市断層帯地震、南海トラフの巨大連動地震が発生した場合の震度分布、建物の被害状況を示しています。

※震度分布、建物の被害状況については、あくまでも予測値であり、マップに表示した以上の被害が発生することも考えられるので、十分な注意が必要です。

平成25年度に岐阜県からの補助金を受けています　関ケ原町

地震とは

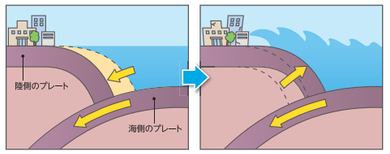
日本周辺の地震には、海溝型地震と活断層型地震の2種類があり、これらの地震は発生のメカニズムが異なります。関ケ原町は、「南海トラフで発生する海溝型地震」と「養老－桑名－四日市断層帯による活断層型地震」を想定しています。「南海トラフで発生する地震」の今後30年以内の発生確率は70%程度と極めて高くなっています。一方、「養老－桑名－四日市断層帯地震」では、30年以内の発生確率は小さいが、発生した場合の被害想定は、「南海トラフで発生する地震」を上回る予測になっています。

海溝型地震

海溝のプレートが陸側のプレートの下にもぐりこむことで、境界にひずみのエネルギーが蓄積され、それが限界に達したときにプレートが元にもどろうとして、地震が起こります。規模が大きい海溝型地震が海洋の下で発生した場合、津波が発生することがあります。古くは「関東大震災」、最近ではまだ記憶に新しい「東日本大震災」がこの海溝型地震に当たります。

震度とマグニチュード

地震のエネルギーの強さをマグニチュードと呼び、地面が揺れる大きさを震度と呼びます。マグニチュードが大きい地震でも、震源が遠い場合や深い場合は、震度が小さくなります。マグニチュードが1増えると、地震のエネルギーは約32倍になります。したがって、マグニチュード8の地震は、マグニチュード7の地震の約32倍のものエネルギーをもった地震であるとされます。

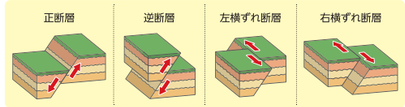


過去における海溝型地震

地震名	発生年月日	規模	被害状況
東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）	2011年3月11日	M9.0	死者は18,703人、行方不明者は2,674人（2013年9月現在）
関東地震（関東大震災）	1923年9月1日	M7.9	死者・行方不明者は10万5000余人

活断層型地震

地下の岩盤に、押し合う力や引っ張り合う力が加わることでひずみのエネルギーが蓄積され、それが限界に達したときに、ある断層面を境に岩盤がずれ動き地震が起こります。古くは「濃尾地震」、比較的最近では「阪神・淡路大震災」がこの活断層型地震に当たります。



断層

地下のプレートが両側から押されることによって、ある面を境としてずれる現象のことをいい、このずれを断層といいます。

活断層

活断層とは、約200万年前から現在の間に活動した証拠があり、今後も繰り返し大地震を発生させる可能性があると判断される断層のことです。

過去における活断層型地震

地震名	発生年月日	規模	被害状況
兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）	1995年1月17日	M7.3	死者は6,434人、行方不明者は3人
濃尾地震	1891年10月28日	M8.0	死者は7,273人

※過去における地震海溝型地震、内陸直下型地震については、気象庁公表の「過去の地震・津波被害」の資料による。

南海トラフを震源とした巨大地震

東海地震

駿河湾西岸から遠州灘東部を震源域とする巨大地震。東海地震の想定震源域では概ね100～150年の間隔で大規模な地震が発生していますが、安政東海地震（1854年）から159年間大地震が発生していないため、相当なひずみが蓄積され、いつ大地震が発生してもおかしくないと言われています。

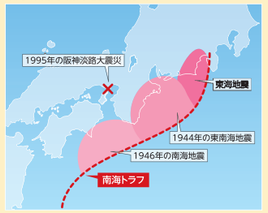
東南海・南海地震

東南海地震は紀伊半島から遠州灘、南海地震は紀伊半島から四国沖を震源域とする巨大地震。およそ100～150年の間隔で発生しています。近年では、昭和東南海地震（1944年）、昭和南海地震（1946年）がこれに当たり、地震発生からすでに70年近く経過しています。

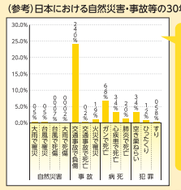
南海トラフの巨大地震（東海・東南海・南海連動地震）

東海・東南海・南海の3つの地震は、いずれも南海トラフ付近を震源域としています。南海トラフでは、過去1400年間を見ると、約100～200年の間隔で蓄積されたひずみを解放する大地震が発生しています。近年では南海トラフ沿いで東海・東南海・南海地震が連動して同時に発生する可能性が指摘されます。南海トラフを震源とした地震（M8～9クラス）が30年以内に発生する確率は70%程度とされています。

東海・東南海・南海地震の震源域



（参考）日本における自然災害・事故等の30年以内の発生確率


30.0%
25.0%
20.0%
15.0%
10.0%
5.0%
0.0%
ほぼ0%
ほぼ0%
ほぼ